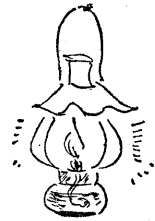


小さな幼稚園

——私の生き方を求めて——



大堀容子

「小さい幼稚園を開園します。五歳児より

三歳児、二十名募集」の小さな看板を近所の塀や店頭に貼り出してスタートした「ひこばえ幼稚園」も、もう三年間が過ぎてしまった。現在は、五歳児十四名（障害者二名）、四歳児十一名、三歳児一名と私と若いがすばらしい保育センスを持った保育者一名で共に生活している。

保育施設としては、土地が七十坪余りのところに二十坪の保育室、二坪の砂場と馬の形をしたジャングルジム、鉄棒一台があるのみである。公道から三十メートル入った私道の一番奥に園舎があるが、私道も園庭の一部のように使える。又二階の私宅の一部も五歳児や母親の集会等にも使用するが、広い庭と家屋を持っている農家が多い

土地柄に狭い保育施設を建てたのだから、人々はとても驚いた。しかもこの東京都西部にある福生市では一番歴史のある教会附属の幼稚園（園児数七十名）が狭いということ、通園バスもなく保育時間が短いこと、給食もないこと等で、園児も集まらずと悪条件の未認可の保育施設を開園したのだから笑い者にもなった。

入園希望の母親も「勇気がある、名もない悪条件の幼稚園に大事な子どもを入園させるなんて」とまで言われたとのことであったが、二年前までは園児も集まらず考え込んでしまった。確かに、東京都の学事課の方も、公認に準ずる施設としては、保育内容は理想的でも、運営規模が小さく、保育料も安くては保育施設として継続性がなると指摘され、認められなかったのだから、世間一般の人々に受け入れられないのは当然なのかも知れない。

しかし二十年間幼稚園に通いながら何かしら中途半端な気持と大勢の子ども達や母親とじっくり交わることでできない不器用さが、いつも心のしこりとなり、完全燃焼しきれないもどかしさを感じていた。四十年を機に、これからの十五年間与えられた私の力を充分発揮し、完全燃焼するにはと散々考えた結果「小さな幼稚園」にたどりついたのである。

*

東北の片田舎で、父母がその土地で教師をし、教え子との交わりにどっぴかりと根を張って生きているのをみながら育って来た私には、父母のように、私自身が幼い子ども達の家庭をとりまく地域社会の一員なのだから、そこに生きる人々の生活習慣や風俗や自然環境を充分に知り、共有しながらその地域に根づいた保育をしたい。又就学前の三年間だけ交わるのではなく、大人になっても交わり続け、お互いに協力し、助け合うことができたら理想的で、この多摩川の水と縁を愛し、いろんなことを心から受け止め、共に喜び、泣き、憤ってみたい。たとえ経済的な苦しみがあっても、それ以上の精神的な満足感があつたら乗り越えられるだろうと。

そして現在、公民館に集まってサークル活動を続けている若い母親と、子どものこ

とについてや、集団保育について語り合い、交わりを持っている。料理講習会でも園児の母親ばかりでなく、近所の人々にも参加してもらい互いに教え、教えられる場にもなりつつある。又今晚のおかずは何にしようかと店の前で互いに考えながら知り合った人から、「来年は三歳になるのでお願いします」と気軽に声をかけられ、こうした日常的なかかわりの中で、近所の太っちょのおばさんであり、先生である人のところに入園するのですから、子どもも緊張感も不安も少ないようである。

ましてや入園式のセレモニーは一切なしで第一日目から遊んで、おみやげに手づくりのケーキをもらって帰るのだから、翌日から一番乗りを目差して登園してくる子ども達で賑やかである。園の行事も市の公園や体育館を利用したり、土手や川原での草つき、虫取りをしたりと身近な所で楽しんでいる。自然や人的環境も、自分達のかか

わり方で、心豊かにもなることを知らせているが、一年毎に理解者も増えて、入園希望者も多くなった。又、近所の人々からの教材の提供もあり、まわりからの協力に感謝している。

*

「小さな幼稚園」を作るにはもう一つの動機があった。それは、二、三年前の新聞に、今年の新入社員は「人工芝型」と命名された記事があった。内容はうる覚えであるが、新入社員の研修に講師で出かけられた先生が、新入社員は身だしなみや、お行儀がよく、お仕着せのトレーニング・ウェアをきちんと身につけ、講義にも熱心に耳をかたむける。なんとも文句のつけようがない優等生ぞろいであるがしばらく観察していると「若者のもつどろどろしたものがなく、いかにも若年寄りのだ」そこで思いついたのが人工芝のイメージ。とにかく

外見からみれば芝目がそろった粒ぞろいに映える。しかし、あれは人工美で本物の美しさではない。雑草は生えなかわりに新芽も育たない。すり切れても、はえ変わる根性がない。一皮めくれば下から硬いコンクリートが出てくる……と。

私の知っている幼稚園でもこの「人工芝型」の人間を育てている部分があるのではないか。お行儀をよくしましょう。先生の言うことに、指示に従いなさいと保育者側が管理しやすいようにと規則々々でしぼり、ピッと笛を吹けば一列にびっちり並びように訓練し、「どうですこんなに上手にきれいに並べるでしょう」と自慢する園長先生、制作展と称して、おしきせのしかも教師の手伝いがおもな制作品を並べて「私の幼稚園はこんなに教育熱心なのです」と鼻高々の保育者をみていると何んだか子ども不在の現実をみせられ、新芽も出ない不毛のコンクリートの心しか持ち得なくな

る子どもを育てることに加担しているのではないかと思ひ、じっとしていられない。

十人十色といわれ、一人一人の顔かたちも違い、育っている環境も異なり、従ってその一人一人のあり方も異なる人間がどうつながっていくのか、どういうふうにしたら疎外しあわないで、互いに仲良く、いっしょに食事をしたり、歌ったり踊ったり、働いたりできるのか、毎日の子どもと母親の関係とか、父親と母親、あるいは祖父母との関係といった非常に具体的な人間のかかわりの中で、その子ども自身が「生きる」ことを体得していくのではないか。

そして、もう一步進めて、同年齢かそれに近い年齢で構成される集団である幼稚園でこそ、その子ども自身に与えられた能力はもちろん、他の子どもとの能力も認め合ひ、強さも弱さも知った上で協調し、思いやっていく人間性が育って行くようにしなければと思つた。しかし、従来の一クラス

四十名近くでは、表面上の交わりやきれいごとで、そして、ちょっと見のよさだけである一律に平等にという考えが先行してしまっただろう。

幸い夫と共に働き、小さな土地と家を求めて生活していた基盤がある。そこに大がかりな施設でなく、人数も二十名前後で生活する場を作った方がいいのではないか、という思いが「ひこぼえ幼稚園」の誕生でもあった。保育について、学問的な理念があったものではなく、私が私らしく生きたいという願いが、この「小さな幼稚園」を設立した動機でもあるから、教育の公共性ということや、文部省の設置基準からお考えの人々にはお叱りを受けることを覚悟している。

*

開園以来、幼い子ども達が、ほんとうに子どもらしく「生きる」ことを願い、「自

発的な遊び」を生活の中心にしている。インスタントでなく、小さな園にふさわしい手作りの教材・教具を用い、日常生活で捨てられてしまうような空箱やビンのフタ・

広告紙等も集めて製作の素材とし、三歳から五歳までの子ども達が、朝の八時三十分から午後一時三十分まで、一人一人が自己を充分に発揮し、満足できる生活ができるように試みている。午前中の三時間近く、それぞれの遊びに没頭する子ども達を見ていると「人と人との間で生きること」の厳しさをのり越えて、たくましく生きる力を持つていることを知らされ、私自身の生き方を教えられることがしばしばある。

ここに昨年五歳児クラスを担任した藤本菜穂子が、卒園にあたって書いた文章があるので紹介する。

山組 男の子五人だけでスタートして、もう一年。同じ五歳児でも一人一人

幼稚園生活歴のちがう五人です。この一年というものは、生れてはじめて五人が、「ひこぼえ」という同じ艦に乗って生活してきました。(中略) 夏休みのキャンプで共同生活を経験し、カレーライスもつくり、きもだめしもして、九月に会うと五人がずいぶん大きくなりました

ね。山組どうしの会話の豊かさに感心したのもこの頃でした。遊びも、野球、かんけりなどルールのあるものへと変わってきました。小さい子への配慮にもなかなかやさしい心づかいがあって、遊びを教えることにかけては、大人も及ばない何かすばらしいものを感じます。しかし同時に大人びてきて分別くさくなり、正面からぶつかってケンカすることが少なくなりました。心の中では、クソツと思っているのに、口の中でブツブツ言ったり、グッとガマンしてみたりするので、ちょうどブリーダーの頃、共同製作

でパズルをつくったのですが、五人ともあまり自己主張しないのです。そしてなぜか口をとぎして黙々と絵を描くのです。私はあせりました。こんなはずじゃない。もっと言いたいことを言ってほしい。堂々とケンカしてほしい。ほんとうに互いが心を閉ざしていやなムードでした。

三学期に入って何かが少し変わってきました。山組の五人がいっしょに遊ぶことが多くなりました。ところが、ここでまたしっくりしないムードがでてきたのです。野球をしてもいつの間にか一人ぬけ二人ぬけしてゆくのです。やめないうで、自分の言いたいことをはっきり言って、にげるのは男らしくない。変にケンカをさせていた五人に私は、乱暴にも山組はもう解散すると言ってしまった。こういうのってきらいなの。するとなんということでしょうか。五人は深刻

な顔で話していました。そうしてもう一回いっしょに遊び始めました。そして次々とケンカが起りました。KとYがぶつかった時、二人ともくやしき一杯で別々のところで一人で泣きましたね。そのあとAとYは、なぐり合いをした日もあり、お互いにぶち合っているうちに泣いていつの間にかおかしくなって笑い出してしまいました。とにかく、このケンカの時期に実にすばらしい男の世界みたいなものを感じました。決してケンカを奨励するものではないのですが、自分の主張を正々堂々とできるようにって本当に良かったナと思うのです。

もう一つ五歳児のM子の場合には、自分から仲間の中に入っていった過程を紹介する。

昨年の四月、四歳児クラスに入園した

M子は、身体も大きく、かわいい表情としぐさでピンクレディの歌をうたったり、ままごが大好きで、いつもお母さん役をするリーダーでもあったが、今年四月以来、心を閉ざし一人で二時間でも三時間でも、女の子の絵を同じパターンで描いたり、空箱を紙でつつみ、自分のロッカーの整理に余念がなく続けられていた。

五月の下旬、「絵本を作る」ということで白紙を十頁綴じてあげる。すると二日ばかりで絵と文を書いたのである。「二人では淋しい。お花とおはなししてみよう。さびしいね。どうしようか。だれか友達つれてくればいい。大きい花、小さい花きれいだね。友達が遊ぼうと言った。なにで遊ぼうか」とページを追うごとに友達と遊びたいという気持がもり上がったのだろうか。描き終った翌日から友達の中に入って行った。しかし、

三か月余りのうちに、今までM子に従順に従っていた仲間は、自己をはっきり主張するようになっていたり、新しい交友関係ができて楽しそうにしている。以前のM子との関係は跡形もない。

M子は、今度は事ごとに攻撃的になり、ののしり、つねる等回りの子ども達を不愉快にすることは繰り返した。その都度、保育者も振りまわされたが、ある時、真正面から、M子の態度に腹が立ち怒ってしまったが、五分後、二人で砂場にどっかりと座って無言の行を三十分続けたこともあった。そして絵本を作って十日過ぎた六月中旬頃からは、新しい人間関係の糸口をみつけて、笑顔が多くみられた。

この様に小人数なるが故に逃げ場のない敵しい人間関係から一段一段と確実に成長するたくましい子ども達でもある。

*

小人数ということは、家庭的な味わいというか、子どもをとりまく家族の人々との交流が園を媒介として発展もしている。子どものおばあさんに、赤飯の炊き方を教わったり、ゆかたや袋物の縫い方を教わったりする若い母親。小学校が休みの時は、お兄さんやお姉さん達がおべんとう持参で一日中小さい子どもと遊んでいく。母親達も手づくりのクッキーや郷土料理の菓子を作って子ども達のおやつにと持って来て一緒に食べることも多くあり、特に、みんなで作って食べることは人数が少ないためかく催される。もち草を摘んでの草だんごやクッキー、カレーライス作りは、子ども達の得意な料理である。

施設の面でも狭いので、ブランコ、スベリ台等はないが、ダンボールや板、積木、つな、座布団等を使い、いろんな場所にい

ろんなスベリ台やブランコができる。その時々みんなの知恵と力を出し合って作るのですから、既成の遊具にはみられない生き生きとした楽しみ方をしている。それから、ゴザを垣根の側や軒下に敷いて、草花を使つてのままごとあそびが展開されたり、ボール遊びや紙飛行機とばし、タコあげ等四メートル幅の私道は、路地あそびには恰好の場でもある。隣家にボールや紙飛行機が入れば「スママセン、ボールとらして下さい」と大きな声で断わることも忘れないのだが。

*

今年度の入園児四名のうちの一人の母親から次の様な便りが来た。

「一月から数回、不規則にお邪魔していた時、最初のうちは園の方針に賛成してはいたものの、実際の子どもの達は、いったいど

うなんだろうかと思って好奇心まじりだった私も、何回か通って子ども達と接するうちに、子ども達の持つ底知れない力に驚きもし、感動したものでした。それは一人一人の子どもが本当に一個の人間として存在しているということでした。そのあたり前といえばあたり前のことが、ここでは、とても大切にそして自然に行なわれているということでした」

母親も交替で園に来て子ども達と遊ぶことになっているが、回数を重ねるごとに、母と子の密着した関係では触れ得ない何かをつかんでいく様である。

*

しかし、問題点も沢山ある。第一に先着順の入園許可ではクラス別の人員構成のバランスが取れないこと。これによって、五歳児が多く、三歳児が少ない場合には、三

歳児には年長児のまとまった活動は刺げきが強く、強烈な印象があり、いつもお姉ちゃんやお兄ちゃん達のようにしたいという要求が強く、三歳児なりの模索する経験が少ないように思われる。そうして、その強烈な印象をうち破って自分なりの遊びに入るには時間がかかるように思われる点である。

第二の問題点は、保育者二名を軸にはしているが、いつでも誰でも出入りができる点である。これはまわりの大人から愛されているということを知らせるねらいで始めたが、大人の不用意な言葉や態度で、夢中になっていた遊びに水を差したり、子どもの理解を越えた大人側の概念を押しつけたりして、子どもの遊びたさをつみ取ってしまう事がみられ、しまったと思うことである。

まだまだ今後に残された課題は沢山あるが、私自身の生き方を求めている小さな試み

であるが、それによって子ども達を踏み台にしてはいけなさと絶えず祈りながらの日である。

(東京・ひこばえ幼稚園)